洋学博覧漫筆

～『解体新書』の出版～

洋学・蘭学と聞いて、イメージするものの一つに『解体新書』があります。

今から237年前の明和8年（1771）、江戸の小塚原刑場で刑死体の腑分けが実施されました。その時立ち会った小浜藩医杉田玄白と中津藩医前野良沢は、それぞれが同じ解剖書『ターフェル・アナトミア』（著者はドイツ人のクルムス、そのオランダ語版）を持参した奇遇に感嘆しつつ、腑分けに臨んだと伝えられています。

刑死体の内臓を観察し、ち密に描かれた解剖図と見比べた玄白は「まるで鏡に映したようにそっくりだ」と興奮し、帰る道々これを翻訳することを決意します。

早速、翌日から長崎でオランダ語を学んだ経験を持つ良沢を囲んで翻訳が進められ、3年後の安永3年（1774）、ようやく『解体新書』の出版にこぎ着けたのでした。

玄白の回顧録『蘭学事始』を読むと、困難を極めた翻訳時の苦労をしのぶことができます。この事業の重要な点は、翻訳することによって西洋の進んだ医学を会得できたということでした。

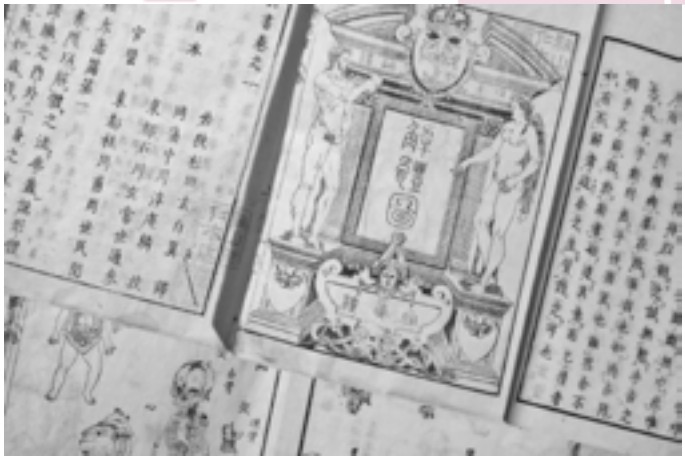
その頃、津山藩江戸屋敷に、先代から漢方医として仕えていた宇田川玄随という青年がいました。

彼は、中国の医学を信奉していた漢方医たちと同様に「西洋の学問と中国の進んだ学問を同列に考えるのは愚かなこと」と思っていました。

しかし『解体新書』翻訳メンバーと交わる機会を得て、次第に西洋医学への関心を深めます。やがて日本最初の西洋内科書『西説内科撰要』を出版し、津山藩の洋学の先駆けとなるのですが、それは後の話にしましょう。

さて、津山洋学資料館に展示されている『解体新書』の見開きを注意して見ていると、著訳者杉田玄白・中川淳庵・石川玄常・桂川甫周の名の上に、わざわざ「日本」と刻まれていることに気付きます。

中国の漢方医学を意識し「西洋医学をアジアで初めて紹介したのは日本人の私たちだ」という、彼らの心意気が伝わってくるようです。



▲籾保の仁木家から寄託されている『解体新書』

※透かしの家紋は右が箕作家、左が宇田川家のもの

つやま広報 4月号
TSUYAMA CITY Public Relations Magazine
平成20年 2008 642号

編集・発行（毎月10日発行）
津山市総合企画部市長公室（市役所3階）
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地
TEL 0868-23-2111(代) FAX 0868-32-2152
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。
http://www.city.tsuyama.okayama.jp/

つ・ぶ・や・き 編集室

春ですね。日和ぽかぽか、心ウキウキ、鼻はムズムズの春ですよ～（泣）。花粉症の人にはつらいけれど、色んな事に対して新鮮な気持ちになれるすてきな季節。新たな気持ちでファインダーをのぞきたい…と思っています。（和）

桜は夏に花芽を付け、長い期間をかけて翌年の春に咲くそうです。4月1日「戸島学校食育センター」と「津山すこやか・こどもセンター」という花が咲きました。今後も市の蕾や開花の情報をお知らせしていきますのでお楽しみに…（2）

「さくらまつり」を始め、多くのイベントが待っている新年度の始まり。新たな1年間でさらに多くの経験を積み、充実した紙面づくりに少しでも貢献できるよう、思いを新たに頑張ります。（&）

2月中のひとの動き

人口	110,269人	（前月比△123）
男	52,630人	（同△43）
女	57,639人	（同△80）
世帯	43,605世帯	（同△24）

転入	219人	転出	318人
出生	89人	死亡	113人

（3月1日現在）

広報つやまは、環境保護のため再生紙と大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください